

# 小学校外国語科における「『聞く力』を育む」

— 児童の興味・関心を高めるスモール・トークを通して —

馬場 威洋<sup>1</sup>

小学校外国語科において、「聞く力」を育むためには、英語の音声にたくさん触れることが重要であると考へた。本研究では、児童の興味・関心に寄り添いながら、知的で現実性のある、まとまった内容で、児童の現在のレベルよりも少しだけ高いレベルの単語や表現を使ったスモール・トークを、視覚的教材を用いながら行うことが、児童の「聞く力」を育むために効果的であることが分かった。

## はじめに

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」においては、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」(中央教育審議会 2016 12月21日)と述べられている。

これを受け「小学校学習指導要領(平成29年告示)」(以下、「学習指導要領」という)では、外国語科の目標を、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を(中略)育成することを目指す」(文部科学省 2017a p. 156)とし、外国語の音声や、日本語と外国語との違いに気付く、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けることをねらいとしている。

コミュニケーションとは、「社会生活を営む人間の間で行う知覚・感情・思考の伝達。言語・記号その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする」ことを指す(新村 2018)。私たちの日常生活の場面においては、言語、特に音声によるコミュニケーションが多く用いられている。

音声によるコミュニケーションについて、小泉は、「『聞く活動』をして、相手の言っていることを理解しようとする気持を育て、その結果として『聞く力』を高めることです。聞くことはコミュニケーションの原点であり、言語学習として最も基礎的な力です」と述べている(小泉 2020 p. 131)。

つまり、コミュニケーションを図る基礎的な技能とは「聞くこと」であり、その力の育成が重要であると考へた。そこで研究の目的を、次のように設定した。

## 研究の目的

児童の外国語を「聞く力」を育むためにスモール・トークが効果的であることを検証する。

## 研究の内容

### 1 所属校の現状

所属校である、横須賀市立高坂小学校の児童の多くは、日頃から教員や友達の話聞く姿勢ができている。授業中は教員の話をするうなずきながら聞き、グループ活動の際は、友達の意見を最後まで聞いてから話し始めるなど、相手の話を聞いて理解しようという思いが強いと考へられる。しかし、筆者がこれまでに実践した外国語の授業では、英語での指示が思うように通らず、英語を日本語に直して再度伝えなければならない場面が多く見られた。

### 2 「聞く力」の育成を目指す研究に至るまで

「学習指導要領」の外国語科の目標には、コミュニケーション能力向上のために、「聞くこと」を始めとした4技能の育成を目指すとある。これを踏まえた英語の目標では、「英語学習の特質を踏まえ、(中略)、聞くこと、読むこと、話すこと[やり取り]、話すこと[発表]、書くことの五つの領域別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、(中略)資質・能力を育成する」(文部科学省 2017a p. 156)とあり、4技能5領域の指導が必要となっている。

ここで共通しているのは、「聞くこと」が最初に記されていることである。「なぜ『聞くこと』が最初に記されているのだろうか」という疑問が、本研究を進めるきっかけとなった。

### 3 研究の方針確定

小学校外国語科における「聞くこと」の重要性について、小泉は、「聞く活動を十分に行うことが小学校英語のはじめの一步ですし、聞く活動なくして他の力をつけることは不可能です。『聞く』ことの経験の上

1 横須賀市立高坂小学校 教諭

に『話す』『読む』『書く』ことがあります」と述べている(小泉 2020 p. 43)。

これは外国語の習得に限ったことではない。母語習得の過程も同様である。例えば、赤ん坊は、周囲の大人が話しかける言葉を十分に聞いて、「ママ」や「マンマ」と、意味のある言葉を発するようになる(小泉 2020 p. 42)。これらのことから、第1言語、第2言語ともに、共通して「聞くこと」からその習得が始まることが分かった。

これらのことを通して、他の領域の技能の礎となる「聞く力」の育成を本研究の課題としたいと考えた。

#### 4 「聞く力」の定義

本研究では、英語の「聞くこと」に焦点を当て、児童の「聞く力」の育成を目指すこととした。

「学習指導要領」における英語の「聞くこと」の目標は、以下のとおりである。

- ア ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。
- イ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取ることができるようにする。
- ウ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。(文部科学省 2017a pp. 156-157)

すなわち「学習指導要領」では、「聞くこと」ができるとは、英語を「聞き取ることができる」、そして内容を「捉えることができる」こととしている。

しかしながら、「聞くこと」が、難しい場面が存在すると考えた。学習者の不安や自信の無さ、動機付けの弱さといった、インプットを妨げる心理的障壁(情意フィルター)は、第2言語習得を難しくしてしまう(Dulay and Burt 1984 pp. 14-15)。

クラッシュェンは、この情意フィルターを低下させることにより、効果的なインプットが可能になると述べている(クラッシュェン 1986 pp. 44-45)(図1)。



図1 情意フィルター操作(クラッシュェン 1986 p. 45)※下線部は筆者加筆。

つまり、聞くための準備段階である動機付けをすることにより、情意フィルターを可能な限り低くすることが必要である。すなわち、児童の「聞こうとする力」の育成も必要だと考えた。

以上のことを踏まえ本研究では、英語を「聞き取る

力」、内容を「捉える力」の前提として「聞こうとする力」があり、これら全てを総合して「聞く力」と定義することとした。(図2)



図2 本研究における「聞く力」の定義

#### 5 スモール・トーク

児童の「聞く力」を育むためには、英語の音声に多く触れることが大切である。そこで本研究では、スモール・トークが効果的ではないかと考えた。

スモール・トークとは『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』によると、「あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることである。また、5年生は指導者の話を聞くことを中心に、6年生ではペアで伝え合うことを中心に行う」こととされている(文部科学省 2017b p. 130)。

教員によるスモール・トークは、児童の興味・関心に寄り添いながら、学習状況に応じてテーマを設定したり、使う英単語を変えたりと、柔軟に対応できるため、児童の「聞く力」を育むために効果的ではないかと考え、次のような工夫をし、実施することとした。

##### (1) 興味・関心を高める内容

スモール・トークの内容を、知的で現実性のある、まとまったテーマ性のあるものにする(小泉 2020 p. 45)。

##### (2) 視覚的支援

教員が話す英語だけでは理解できないことも多くあることから、ジェスチャーやイラスト、写真、実物、スライド資料の提示など、視覚的な支援を行う(小泉 2020 p. 45)。

##### (3) インプット仮説(i+1)

クラッシュェンのインプット仮説(以下「i+1」という)によると、学習者の現在のレベル(i)よりも、少しだけ高いレベル(+1)のインプットが、第2言語習得には欠かせない(クラッシュェン 1986 p. 36)。これまでに学習した英単語や表現だけではなく、内容に関連している初めて聞く英単語や、文脈の中で意味が分からなくとも理解できる表現を取り入れる。

##### (4) Pre-listening

スモール・トークを行う際、「これから〇〇についての話をします」など、教員によるスモール・トーク

を聞く準備としての場面設定(文部科学省 2017b p. 46)を行う(Pre-listening)。児童の実態や内容により、英語で行うことも、日本語で行うこともある。

## 6 研究仮説

以上を踏まえて、次のように仮説を立てた。

教員によるスモール・トークを聞くことで、児童の「英語を『聞く力』」が育まれるだろう。

## 7 検証方法

児童の興味・関心を高めるスモール・トークを取り入れた検証授業を考案・実践し、次の方法でデータを収集した。

### (1) 児童の様子

各時間のスモール・トークと児童の反応、検証授業期間の児童の様子や変化を分析した。

### (2) ワークシート

スモール・トーク終了後の内容確認問題と、自由記述を分析した。

内容確認問題は1～2問程度の選択問題を出題し、スモール・トークで聞き取れたものを回答させた。

自由記述では、スモール・トークを聞いて初めて知ったことや感想を書かせた。

### (3) 振り返りカード

毎授業の終わりに、児童に自己評価と自由記述をさせ、その変化を分析した。

自己評価は、「英語の授業に進んで取り組むことができましたか(主体性)」「先生が英語で何の話をしているか理解できましたか(聞く力)」「友達や先生と英語で話すことができましたか(話す力)」に分類し、児童は3段階(◎よくできた、○できた、△あまりできなかった)で自己評価を行った。検証授業においての児童の自己評価の変化を分析した。

自由記述には、「今日の学び」を書かせた。

### (4) 質問紙調査

検証授業の前及び、検証授業の後に質問紙調査を実施し、比較・分析をした。質問内容を「主体性」「聞く力」「話す力」に分類した。

【質問紙調査実施期間】

事前：令和3年9月30日(木)

事後：令和3年10月25日(月)

## 8 検証授業の概要

【実施期間】令和3年10月1日(金)～10月22日(金)

【対象】横須賀市立高坂小学校第5学年2学級(67名)

【科目】外国語(英語)

【単元名】I can run fast.

【授業時間】各学級7時間

各授業の流れは、以下のとおりである(表1)。なお

スモール・トークは、毎時間、授業の初めに帯活動として実施することとした。

表1 授業の流れ

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時
Greeting	①あいさつ ②前時に学習した表現を使って発音練習をする。						
Warm up							
Small Talk	Can	Colors	Animal Quiz	American English vs. British English	Numbers	Speed	Vegetables
Today's goal	本時のめあてを確認する。						
Activity	動画を見て、だれがどのようなことができるかを聞き取る。	各人物がそれぞれどのようなことができるかを聞き取る。	動物なりきりクイズを作り、出題し合う。	友達のできることを聞き取り、He, Sheを使って紹介し合う。	できることを友達と尋ね合う。友達のできることをクラスに紹介する。	自分ができることを3つ選びWSに書く。	できることの発表会をし、クラスの「できることの本」を完成させる。
Reflection	ふりかえりカードに自己評価と今日の学びを記入する。						

## 9 検証結果と考察

### (1) 児童の様子

#### ア 各時間のスモール・トークと児童の反応

#### (7) 1時間目

Canをテーマに、自己紹介を行った(表2)。「I like yo-yos. I have four thousand yo-yos. I can play yo-yos.」と、写真や実物を提示しながら、実際にヨーヨーを披露するなど、児童にとってより身近なテーマで行った。

表2 1時間目のスモール・トーク

内容	Can
視覚的支援	ジェスチャー・スライド資料・実物の提示・実演
「i + 1」	4000=four thousand
Pre-listening	「先生の話をしてします」

「i + 1」は、大きな数を扱った。1(one)、10(ten)、100(hundred)、1000(thousand)と板書し、4000(four thousand)を提示しながら話をした。

また、can'tも扱った。can・can'tの意味は伝えていなかったが、できること・できないことと理解している様子を見ることができた。

#### (4) 2時間目

外国語活動で慣れ親しんだ、色についての話をした(表3)。初めに、「What color is this?」と、色画用紙を提示しながら答えさせた。

表3 2時間目のスモール・トーク

内容	Colors
視覚的支援	ジェスチャー・スライド資料・実物の提示
「i + 1」	taste/similar/peel 等
Pre-listening	「今日は色の話をします」

知的な内容としては、緑のバナナを提示し、緑のバナナについての話をした(小泉 2011 pp. 16-17)。児童は、緑色のバナナを調理すると、里芋の味に似ていることに驚いた様子であった。

### (ウ) 3時間目

アクティビティにもAnimal Quizがあることから、スモール・トークのテーマも同様とした(表4)。

表4 3時間目のスモール・トーク

内容	Animal Quiz
視覚的支援	ジェスチャー・スライド資料・動画の提示
「i + 1」	per day/from A to B 等
Pre-listening	「Let's have a quiz!」

知的な内容としては、コアラが1日に18~20時間も眠るということや、コアラが木から木へ跳び移ることを、クイズを通して伝えた。この時間から、児童が事前に授業の内容を聞いてくるようになり、興味・関心の高まりを感じることができた。ワークシートには、聞き取れた内容や、初めて知ったことについて多く書かれていた。

### (I) 4時間目

アメリカとイギリスで言い方が異なるものについて紹介をした(表5)。本時のアクティビティでは、heとsheが内容として出てくるため、スモール・トークでもそれを扱った。

表5 4時間目のスモール・トーク

内容	American English vs. British English
視覚的支援	ジェスチャー・スライド資料・実物の提示
「i + 1」	UK/different/call A B 等
Pre-listening	「What's this?」

ワークシートでは、今学習しているものは、アメリカで話されている英語が多いことに気付く様子を見ることができた。

### (オ) 5時間目

数の復習を行った後、1時間目のthousandよりもさらに大きな数であるmillionも取り入れた(表6)。本時は、身近な数に関する話や、富士山の高さ、マラソンの距離を英語でどのように言うのかを考えさせながら進めた。

表6 5時間目のスモール・トーク

内容	Numbers
視覚的支援	ジェスチャー・スライド資料の提示・板書
「i + 1」	million 等
Pre-listening	「Today's small talk is numbers.」

ワークシートからは、マラソンの距離を初めて知ったり、その距離が学校から直線距離でどの位置であるのかを考えたりする様子を見ることができた。

### (カ) 6時間目

速さについての話をした(表7)。まず、児童が普段どのくらいの速さで50m走を走っているのかを考えさ

せた。次に、100m走世界記録保持者のウサイン・ボルト氏の走る速さと、児童の速さを比べたあと、カバとウサイン・ボルト氏では、どちらの方が速いかを尋ねた。

表7 6時間目のスモール・トーク

内容	Speed
視覚的支援	ジェスチャー・スライド資料・実物の提示
「i + 1」	run 100m in 9.95 seconds 等
Pre-listening	「Today's small talk is speed.」

カバの最高速度が、ウサイン・ボルト氏よりも速いことがあるという事実に衝撃を受けた様子であった。また、新幹線や地球の自転、人工衛星がどのくらいの速さで動いているかの話をする、もっと速いものを調べてくる児童もいた。

### (キ) 7時間目

「普段食べている野菜は、植物のどの部分であるのか」と提示し、問題を解く形式でのスモール・トークを行った(小泉 2011 pp.70-71)(表8)。提示した野菜については、1~5年生までに学習したものを取り入れた。生活科、理科、社会科、総合的な学習の時間と、教科横断的な学習をすることができたのではないかと考えられる。

表8 7時間目のスモール・トーク

内容	Vegetables
視覚的支援	ジェスチャー・スライド資料・実物の提示
「i + 1」	part/root/stem 等
Pre-listening	「I can eat a flower.」

対象児童は、総合的な学習の時間で米の栽培に取り組んでいたため、既習事項をいかしながら、米は種の部分を食べていると答えることができた。また、サツマイモとジャガイモでは、食べている部分が異なることに驚いた様子であった。他にも、理科で学習したことと関連した感想を述べる児童もいた。

### イ 検証授業期間における児童の様子

授業が始まる前や、終わった後に、スモール・トークの内容について、「家族に話をした」と言ってきたり、興味を持った内容について「調べた」と言ってきたりと、スモール・トークが児童の印象に深く残っている様子を見ることができた。このことから、スモール・トークが、児童の興味・関心を高め、「聞く力」の育成に繋がっていったと考えられる。

### (2) ワークシート

内容確認問題では、正答率が平均して98.4%であったことから、英語を「聞き取ることができる」結果に繋がっているのではないかと考えられる。

児童の自由記述では、英語を「聞く力」が育まれたと考えられる内容が多く見られた。以下は児童の自由

記述の一例である。

- ・先生の言葉が少し聞き取れるようになった。
- ・初めて知ったことがたくさんあった。
- ・カバが時速50kmで走るということが分かって楽しかった。

初めて知ったことや、スモール・トークの知的な内容について書いている児童が多く、英語を聞き取れたという自信にも繋がったと考えられる。

### (3) 振り返りカード

#### ア 自己評価

授業を重ねるごとに、段階的に△から○、○から◎へと変化していったことが分かる(図3)。すなわち、「主体性」「聞く力」「話す力」が育まれていったと考えることができる。

Date(日付)	児童A	10/6	10/7	10/13	10/14	10/15	10/20	10/21
英語の授業に進んで取り組むことができましたか。	○	○	◎	○	◎	◎	◎	◎
先生が英語で何の話をしているのか理解できましたか。	○	○	○	○	◎	◎	◎	◎
友だちや先生と英語で話すことができましたか。	△	△	△	△	◎	◎	◎	◎

Date(日付)	児童B	10/6	10/7	10/13	10/14	10/15	10/21	10/22
英語の授業に進んで取り組むことができましたか。	△	○	◎	○	◎	◎	◎	◎
先生が英語で何の話をしているのか理解できましたか。	△	△	○	○	◎	◎	◎	◎
友だちや先生と英語で話すことができましたか。	△	△	△	○	◎	◎	◎	◎

図3 振り返りカード 児童A・Bの自己評価

#### イ 自由記述(今日の学び)

振り返りカードの記述欄「今日の学び」では、以下のような記述が多く見られた。

- ・英語で知らないことを知れた。
- ・友だちはピアノとバスケットボールができるんだって。すごい。
- ・友達のことをもっと知れたと思います。
- ・友達のできることを聞き取れて、自分のできることも伝えられた。

スモール・トークでは、第1言語ではないのに、新しいことを知ることができた驚きが見られた。また、児童同士が交流をした際、相手が話す英語を聞き取ることができ、友達の新たな一面を知ることができた喜びも見られた。聞き取れただけでなく、「自分のことも伝えられた」と書いた児童もおり、「聞く力」が生まれ「話す力」へと繋がっていったと考えられる。

### (4) 質問紙調査

#### ア 主体性

「英語の授業は楽しい」「英語の授業に進んで参加している」の項目に「よく当てはまる」と回答した児童は、どちらも有意な伸びが見られた(図4、図5)。

このことから、「児童の興味・関心を高めるスモール・トーク」により、主体的に学習に取り組む態度が育まれ、結果として情意フィルターが低下し、「聞こうとする力」の育成に効果があったと考えられる。

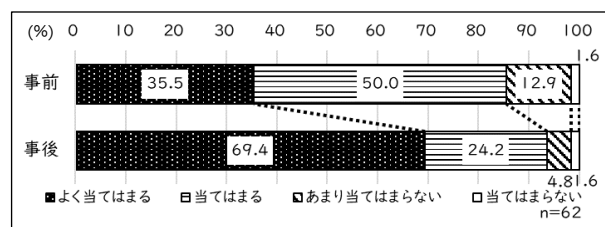


図4 英語の授業は楽しい

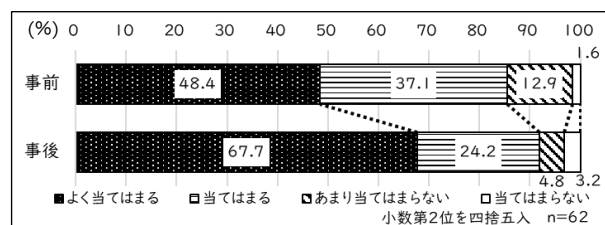


図5 英語の授業に進んで参加している

#### イ 聞く力

「授業の話題がおもしろい」の項目に「よく当てはまる」と回答した児童は、検証授業前と比較すると2倍以上となり、有意な伸びが見られた(図6)。

また、「英語の知っている言葉を聞き取ることができる」の項目でも、「よく当てはまる」と回答した児童が約24ポイント増え、有意な伸びが見られた(図7)。

「英語で話された内容を理解することができる」では、検証授業後、全体の半数以上の児童が「よく当てはまる」と回答しており、有意な伸びが見られた(図8)。

「友だちが話す英語を聞いて、友だちの伝えたいことが分かる」では、約96%の児童が肯定的な回答をしており、有意な伸びが見られた。(図9)

スモール・トークを通じて英語を聞く機会が増え、英語を「聞こうとする力」、「聞き取る力」、内容を「捉える力」が伸びたことを、児童自身が実感できる結果になったと考えられる。

このことから、「児童の興味・関心を高めるスモール・トーク」は、英語を「聞く力」の育成に有効であったと考えられる。

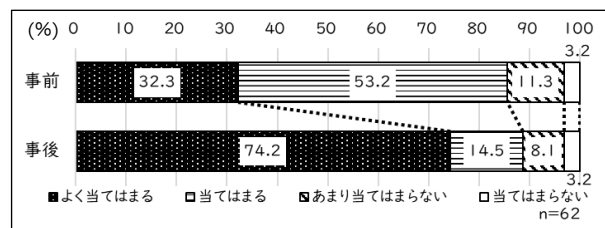


図6 授業の話題がおもしろい

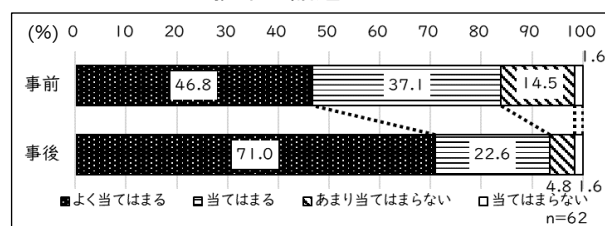


図7 英語の知っている言葉を聞き取ることができる

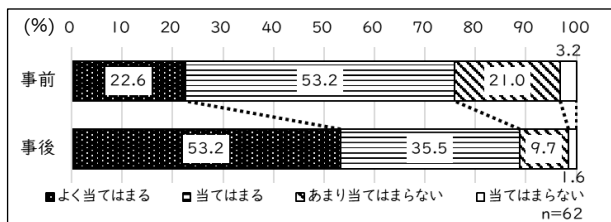


図8 英語で話された内容を理解することができる

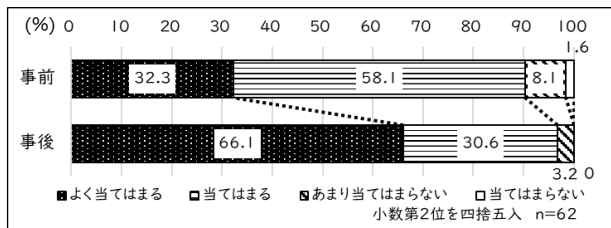


図9 友だちが話す英語を聞いて、友だちの伝えたいことが分かる

## ウ 話す力

「英語で自分の伝えたいことを伝えることができる」の項目では、検証授業前に約7割だった肯定的な回答は、検証授業後は約9割に上昇した(図10)。「聞く力」が育まれ「話す力」への移行が起こったと考えられる結果となった。

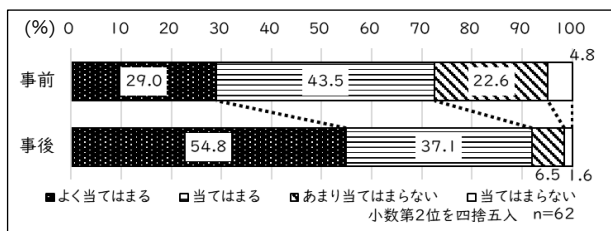


図10 英語で自分の伝えたいことを伝えることができる

## 研究のまとめ

### 1 成果

「児童の興味・関心を高めるスモール・トーク」は、児童の実態に合わせて工夫して行うことで、英語を「聞こうとする力」の向上に繋がり、結果として、英語を「聞く力」を育むために効果的であったと考えられる。

### 2 課題

本研究では、児童の英語を「聞き取る力」、内容を「捉える力」についての、客観的な数値的変容を見取することはしていない。

今後の展望としては、それらをどう見取っていけばよいか、見取り方の研究を進めていきたいと考えている。

## おわりに

今後も「聞く力」を育むための教材研究を進め、外

国語によるコミュニケーション能力の育成に繋げていきたい。今回の成果と課題を多くの教員で共有し、今後の授業づくりにいかしていきたいと考えている。

最後に、本研究を進めるに当たり、御協力いただいた横須賀市立高坂小学校の学校長を始め、教職員、児童の皆様に深く感謝申し上げる。

## 引用文献

- 中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」 p. 193  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (2021年12月22日取得)
- 文部科学省 2017a 「小学校学習指導要領(平成29年告示)」
- 文部科学省 2017b 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 旺文社
- 小泉清裕 2020 『小学校英語 授業づくりの心と技—児童の学びの力を育む』 大修館書店
- 新村出 2018 『広辞苑第七版』 岩波書店

## 参考文献

- 金森強 2013 『小学校外国語活動 成功させる55の秘訣—うまくいかないのには理由がある—』 成美堂
- クラッシュン・テレル著 藤森和子訳 1986 『ナチュラル・アプローチのすすめ』 大修館書店
- 小泉清裕 2011 『[小学校] 英語活動ネタのタネ』 アルク
- 田崎清忠 2011 『現代英語教授法総覧』 大修館書店
- 樋口忠彦・高橋一幸・加賀田哲也・泉恵美子 2017 『Q&A 小学校英語指導法辞典—教師の質問112に答える—』 教育出版
- Heidi Dulay・Marina Burt・Stephen Krashen著 牧野高吉訳 1984 『第2言語の習得』 鷹書房弓プレス

## 参考資料

- 小学校英語 Kiyoko's room 「おもしろい! 同じ英語とはいえ国によって違う言い方のものがある!」  
<https://www.youtube.com/watch?v=Fe2nNa9bmqQ> (2021年12月22日取得)